
ローレンス・ランズマン ～人魚に捧げる航海日誌～

風早 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローレンス・ランズマン　　人魚に捧げる航海日誌

【Nコード】

N89440

【作者名】

風早　遥

【あらすじ】

有名な冒険家の息子、ローレンス・ラングマンは、父の死をきっかけに新しい局面を迎えた。

父の死の真相、自分にかけられた人魚の呪いについて調べるため、ローレンスは港町で商船に乗り込む。

しかし、その商船が海賊船に襲われてしまい、ローレンスの運命はさらに、複雑に絡み合った思惑に取り込まれていく――。

海洋ファンタジー。

prologue

ローレンスはドアノブを回し、父の書斎に足を踏み入れた。

ローレンスの父はいわゆる秘密主義者という人種で、自分のいない間に、この書斎に他者が入るのをひどく嫌っていたため、本来ならば許されない行為であった。

しかし、咎められるおそれはない。

ローレンスは父の遺品を整理するために、この部屋に足を向けたのだ。

誰もが知る有名な冒険家、ウィリアム・ラングマンは、つい一週間前にこの世を去った。

ローレンスがその事実を知ったのは、三日前だ。

それも、新聞で。

その時の感覚を、ローレンスは一生忘れないだろう。

新聞を握る指先は、それこそ死人のように冷え切っていた。

頭は記事の内容で埋め尽くされているのに、すぐには呑みこめなくて、ローレンスは何度もその記事を読み返した。

当然、見つめたからといって、書かれている言葉が変わるわけではない。

記事の内容はあいまいで、ラングマン氏は火事に巻き込まれて死んだため、遺体はなかったとだけ書かれていた。

ほとんど家に帰ることのなかった父だが、たった一人の家族を失ってしまった悲しみは、予想以上に大きかった。

ローレンスはとにかく、この無気力状態から抜け出そうと、父の死についての情報を集めた。

情報、知識。

これまで、ローレンスが武器にしてきたものだ。

しかし、そのどれもが新聞の内容と大して変わらず、父と親しかった友人たちも、わざわざ遠くから駆け付けてくれたが、有力な情報は何ひとつ得られなかった。

これがどれだけローレンスを落胆させたか、わからない。

ローレンスは幼い頃から、この広い家で、一人で生活していた。

もちろん、それは近所に住む村人たちが色々と面倒を見てくれたから可能であったのだが、常に孤独がつきまっていた。

もしこの家に書物がなかったら、ローレンスはこの家を守ってくれという、父の頼みに背いて、とっくの昔に家を出ていただろう。

幸い、読み書きから始まり、高度な学術知識を父から学んでいたため、本棚にびっしりと並んだ難解な書物がローレンスの心を慰めて

くれた。

しかも、ローレンスは、一度見たものを忘れない。

この才能のおかげで、十代の半ばにして、ローレンスは六ヶ国語に精通するまでになっていた。

一番の問題、お金のことに關しては、心配はいらなかった。

父の書籍はよく売れたが、冒険の末に得た宝石や財宝はその何倍もの価値を持っていた。

あまり家に大金を置いておくと、ローレンスの身が危険だということとで、父はそのお金をどこかに寄付したり、大きな買い物（船がい例だ）をしたりしていたが、それでも、この先困らないだけの金額は残っていた。

それをどう使うかは、ローレンス次第だ。

大学に通うことも、商売を営むこともできる。

今、ローレンスの前にはいくつもの選択肢があり、なろうと思えば、ローレンスにはなににだってなることができるだろう。

これが自由なのかと、ローレンスはため息をついた。

夢ならあった。

ローレンスが十八になったら、冒険の供をさせてくれると、父は約束してくれていたのだ。

それは夢物語のようではあったが、ローレンスはその未来像を疑ったことはなかった。

それが、一瞬のうちに壊れてしまった……。

父の書斎の真ん中で立ち尽くしていると、ふいに、開け放った窓から風が吹いてきた。

かすかに潮の匂いがする。

——なぜ？

ローレンスは眉をひそめた。

ここは港町ではない。

港町まで——海までは、三つほど町を越えなければならない。

ローレンスは導かれるように、窓辺にふらふらと近寄った。

潮の匂いをたつぷり含んだ風が、ローレンスの頬をなでていく。

その感触が心地よいと感じた、次の瞬間、ローレンスは激痛に襲われて膝をついた。

額が割れるように痛い。

こめかみを押さえながら、ローレンスは父のデスクの上に手を這わせた。

目当てのもの――鏡に指先が触れ、ローレンスは自分の額を映した。

「なんだ、これは……」

ローレンスは普段、独り言を言わない。

しかし、このときだけは、自然と口から言葉が出ていた。

思わずつめき声をあげてしまうほどのものが、鏡に映っていた。

恐る恐る指先で額の皮膚に触れてみる。

そつとこすつてみたが、それはインクの類ではなかった。

額に痣ができていた。

うるこのような、鮮やかな模様。

蛇に巻きつかれたら、こんな痣ができるだろうか。

袖で少しきつめにこすつてみたが、どうにもならない。

途方に暮れ、これは医者にみせるべきだろうかと思案していると、家のベルが鳴った。

また、父の知人が来たのだろう。

ローレンスはさっと部屋を出て、救護セットの中から包帯を探し出し、手荒く額に巻いて、家の玄関を開けた。

目の前に、初老の男が立っていた。

穏やかそうな顔つきの男で、鼻の上に乗った眼鏡が、知的な雰囲気によく似合っている。

訪問客は当たり障りのない挨拶を口にしようとして、ローレンスの額に目をやった。

「その怪我は、どうしたんだい？」

「いえ、怪我ではないんですけど」

ローレンスは照れて、包帯に触れた。

「ええと、どちら様でしょうか？」

「すまないね、自己紹介が遅れてしまったが……」

男はジャケットのポケットから名刺を取り出した。

「マイケル・フォスター博士……」

「その名刺に書いてあるように、考古学を学んでいる。君のお父さんとは親しくさせてもらっていてね……」

フォスター博士はありきたりな言葉を口にし、自分の口から出たその言葉に顔をしかめた。

「いや、親しかった、なんて言葉では言い表せない。」

私たちは親友だった。

君のお父さんは——ウィリアムは、あの通り愛想がよくて、人に好かれるタイプだったから、いつでも人に囲まれていたが……私は彼の一番の親友だったと自負しているよ」

フォスター博士の目に深い哀愁が漂った。

これまで父を悼んでやってきた友人たちは、みんな目をうるませていたが、フォスター博士の悲しみはそのどれよりも深かった。

この人物をよく知らないローレンスでさえ、その様子が見て取れるのだ。

フォスター博士はローレンスの視線に気づき、ふっと顔をあげた。

その真剣な眼差しに、ローレンスはぴくりと肩を揺らした。

髪は白髪が混じっていたが、フォスター博士には、老いによる衰えを感じさせないだけの力強さがあった。

「ローレンスは、私にだけは隠しことをしなかった。全部話してくれたよ。」

おそらく君は、なにも知らないと思うが……」

「父の死について、なにか御存じなんですか？」

「予測はついている」

ローレンスは少し考え込んだが、客人を立たせっぱなしにしていたことに気付き、非礼を詫びて家にあげた。

椅子に座ると、フォスター博士はすぐに本題に入った。

「いや、紅茶はいいよ。」

それより、その包帯を取ってみせてくれないか」

「あまり、気持ちのいいものではありませんけど」

ローレンスは包帯をほどいた。

フォスター博士の息を呑む音。

どうやら医者に行く必要はないようだ、ローレンスは頭の隅で思った。

「それと同じものを見たことがある。」

君のお父さんの背中にも同じものがあつた。

君は額に出たんだな……」

「さっき、急に浮かび上がってきたんです」

「それは呪いだよ」

「え？」

「呪いだ、ウィリアムは言っていた。」

人間に課せられる、最も残酷な罰だとも」

「なんの呪いなんですか？」

「それは教えてくれなかった」

そんな曖昧な話を、フォスター博士は信じたのだろうか。

父がそんな嘘をつくとは思えないが、ローレンスは半信半疑のまま尋ねた。

「ぼくは、死ぬんでしょうか」

自分の台詞に心臓が跳ね上がったが、フォスター博士は静かに首を横に振った。

「君は、この苦痛を知るには、あまりにも若い」

「教えてくださらないんですね。
少なくとも、今はまだ」

「君は聡明だ。父親の思慮深さを受け継いだのか、あるいは母親が……」

「母を知っているんですか？」

ローレンスは驚いて、無意識に椅子から腰を浮かせていた。

ローレンスは自分の母親を全く知らなかった。

母親の話を聞かなかったわけではなかったが、母の話をするとき、父はどこかおとぎ話を聞かせるような口調で語る癖があったので、正確なイメージ像というものが持てなかったのだ。

「その話も、今度会ったときにしよう。
それより、君に渡すものがある」

フォスター博士は鞆の奥から一通の手紙を取り出した。

テーブルの上に置かれた手紙を、ローレンスは震える手で受け取った。

「父の筆跡だ」

「自分に何かあった時、渡してくれと頼まれた。
もう何年も前だ」

冒険家というものは、常に危険と隣り合わせで生きている。

しかし、ローレンスにはいまいちピンとこなかった。

どうしても、こう考えてしまう。

手紙をフォスター博士に託したときから、どこかで死の影を察知していたのではないかと。

父の死に方が、ローレンスに「おかしい」と思わせるのだ。

「読みますね」

フォスター博士の目を見て確認をとり、ローレンスは声に出して読み上げた。

親愛なる息子へ

お前がこれを読むとき、おそらく私は——まあ、そういうことになっているだろう。

不吉な単語は書きたくないの、割愛するが、お前に一言謝っておこう。

父親らしいことをしてやれなかったことも悔やまれる。

しかも、私はお前に、大きな仕事を頼むつもりでいる。

マイクから話を聞いただろうが、呪いのことは、ひとまず置いておいてくれ。

それよりも、差し迫った仕事と、呪いよりも直接的にお前を害す者について書いておこう。

この手紙を読んだら、家を燃やせ。

私の本棚にある赤い表紙の『航海日誌』以外は何も持たずに行ってくれ。

なんとも無責任な終わり方をするが、その日誌を読めばすべてわかる。

それでは、ごきげんよう。

彼らしい遺書だと、ローレンスはぼんやりと思った。

息子が愛しいのだと、目と声音、行動や仕草で、伝えるくせに、そういった言葉は絶対に言わないのだ。

熱くなる目頭を指で押さえ、ローレンスはフォスター博士に向き直った。

「これがどういう意味か、わかりますか？
僕はどうすればいいのか……」

「その手紙に書いてある通りに、動くべきだろうね」

フォスター博士にとってもこの遺言の内容は疑問だったらしく、困惑を隠し切れていなかったが、博士の言葉はローレンスに腰を上げさせた。

「じゃあ、そうしましょう。」

父の言う日誌を探してきます。

あんまり周囲に被害が及ばない燃やし方がいいんですけど……」

「君が日誌を探している間に、考えておこう」

「お願いします」

ローレンスは頭を下げ、応接間を出ていった。

ローレンスにとって最も思い入れのあるこの場所を失うのは、たった一人の家族を失うことの次につらいことだった。

しかし、何かに急きたてられるように、ローレンスは書斎に足を向

けた。

父の記した日誌を取り、家を燃やすために。

父の意図はわからなかった。

しかし、この家を燃やしてしまうことは、父の最期の願いを叶えるだけでなく、自分自身のためにすべき行為でもあるかもしれない。

そう考えると、一刻も早くこの家を燃やしてしまいたかった。

この家がある限り、ローレンスはきっと、ここから離れられない。

本当の意味で自由になり、新しい一歩を踏み出すためには、区切りをはっきりさせる「儀式」が必要なのだ。

ローレンスは自分に言い聞かせ、再び書斎の扉を開けた。

第一部（1）（前書き）

フォスター博士と別れ、港町に向かったローレンス。

そこで出会った商人の誘いを受け、ローレンスは彼の商船に乗り込んだが――。

海賊船に遭遇し、ローレンスが剣を手取るまで。

第一部（１）

炎が燃えさかり、煙が空に立ち昇っていく。

水色のキャンパスに無粋な灰色が混ざり、ローレンスはその光景を見ながら、ひどい違和感を感じていた。

悲しみはない。

貴重な書物や、父の持ち帰った宝が——そして、父と過ごした日々の思い出が消えていくのを、ローレンスはフォスター博士の横に並んで、その目に焼き付けた。

あらかじめ近所の住人には家を燃やすことを告げたので（不審な顔をされたが、当然だろう）、家の周囲には、ローレンスとフォスター博士の二人だけが立っていた。

視線を感じて横を向くと、フォスター博士と目が合った。

今は同情の言葉など聞きたくない。

これは終わりではなく、始まりなのだ。

嘆いている暇はないし、嘆くつもりもない。

ローレンスは汗ではりついた前髪をかきあげた。

今は秋だが、さすがに目の前で家が燃えていると、首筋に汗がにじんだ。

フォスター博士もポケットからハンカチを取り出し、首筋に押し当てた。

「ずいぶん軽い荷物だが、君は物欲がないんだね」

「あなただって、手ぶらじゃないですか。」

ぼくは、あなたに父の遺品を受け取ってもらいたかったのに」

「空しいじゃないか。」

本人がいないのに、本人の持ち物だけが残るなんて」

それもそうだと思い、ローレンスはうなづいた。

今の一言で、胸につかえていた最後の一固まりが消え去った。

「もう少しで全焼ですね。火の勢いが弱くなってきた」

「この後、どうするんだ？」

「ぼくは港町に向かいます。」

そこで、どこかの船に乗せてもらって、色々な場所を見ていこうと思っているんです。

ぼくは確かに物知りかもしれないけど、経験に関しては赤子並みだから」

「それなら、私は陸で君のお父さんについて調べよう。」

詳しいことがわかったら、手紙を書く。

君は港につくたびに、私の家に自分の現在地を書いて、送ってくれ」

「わかりました」

「さて、火が消えたし、旅立ちといこうか。
途中まで一緒に行こう」

ローレンスは黙ってうなづき、フォスター博士にうながされて、
住み慣れた家に背を向けた。

ローレンスはごくわずかな荷物を手に、港町にやってきた。

あらゆる型の船が停泊し、商人たちが忙しく立ち回っている。

ローレンスはぼんやりと海を眺めていたが、その姿が目をひいた
のか、一人の男がローレンスの隣に立った。

男がなにも言わないので、ローレンスはそのまゝ海を見続けた。

やがて、男が口を開いた。

「君は、『セントエルモの火』を知っているか？」

ローレンスは隣に立つ男を見上げた。

相変わらず、男は海を見たままだ。

「聖なる吉兆の印ですね。」

天候が悪くなると、船のマストの先端が発光するっていう」

「そう。船乗りの間では有名な話だ。

セントエルモの火が出現すると、航海の守護神のご加護により、嵐が収まる……とな。

嵐の中でもこの現象が発生すると、みんな助かったと喜び合うんだ。だが、お偉い学者さんたちのおかげで、最近はこれも自然現象で片づけられるらしいな」

そこで初めて、男がまっすぐにローレンスを見た。

どこか値踏みするような視線だ。

「君は賢そうだ。

物理学的に説明できるかね？」

「あれは、とがった物体の先端で静電気なんかが『コロナ放電』を発生させて、青白い光を発生させる現象です。嵐の時に見られるのは、雷による強い電界が、マストの先端を発光させるためですね」

「そう。非常に論理的だ。

だが、君は最初に『聖なる吉兆のしるし』だと答えた。なぜかね？」

「だって……そっちのほうが、面白いじゃないですか。『セントエルモの火』は、船乗りにとって、希望です。真実を知るのもいいけど、希望が持てる説明のほうが、素敵だと思いますか？」

男は愉快そうに笑った。

「やはり、私が見込んだ通りだ！

「いやね、私はこの国の人間だが、世界を旅する商人なんだ」

男は誇らしげに言った。

「あそこに、そこそこ見栄えのいい商船があるだろう。あれだ。

今日の夜にはこの港を離れるつもりなんだが、船員が二人、航海士が一人、船を下りてしまって、困っていたんだ。

みんな、陸でもっと安全に、効率的に稼ぎたいというんだ。なんと下らない理由だ！

ロマンの欠片もない。

と、まあ、話がそれってしまったんだが、今から欠けたぶん、新しく船員を募集しようと思っていたところだったんだ。

君は話がわかるようだから、どうだね、私の船に乗らないか？」

話を聞いているうちに、もしかして、と希望を抱いていたが、本当に誘ってもらえるとは思っていなかった。

ローレンスは頬を赤くして、二つ返事で答えた。

「もちろん、喜んで。

商船に乗って、世界を旅したいと計画したところだったんです。ぼくは航海術も知っていますから、役に立てると思います」

「そうか！

それは頼もしい。

いやあ、人を見る目には自信があるんだが、こんなアタリは初めてだ。

よし、ついてきなさい。

私はジョージ・アストンだ」

アストンが片手を差し出したので、ローレンスも握手に応じながら自己紹介をした。

「ランズマン？　もしかして、ウィリアム・ランズマンの息子かい？」

「ええ、そうです」

次に言われることは、簡単に予測がつく。

同情されるのではないかと——それが一番つらいのだ——身構えたが、アストンは海を冒険する者らしく、つまらない言葉は口にしなかった。

「そうか。同情されたりするのは、もう飽きているはずだから、なにも言わないでおこう。」

しかし、あの有名な冒険家の息子と航海ができるとはラッキーだ」

アストンが歩き出したので、ローレンスも隣に並んで歩いた。

「海に出れば、憂鬱な気分も吹き飛ぶぞ。」

海は広いからな。小さい悩みも大きい悩みも、すべて等しく取るに足らないものだと感じるのさ」

それがどういう感覚なのか、ローレンスはまだ知らない。

だが、想像することならできる。

そうかもしれないな、と思い、ローレンスは頷いた。

第一部(2)(前書き)

ローレンスが海賊になるまで。

第一部(2)

そんなことがあって、ローレンスは商船の乗組員——航海士として迎えられた。最初の数日間、航海士としてきちんと役割を果たせるか不安だったが——いくら知識を詰め込んでいても、経験に勝るものはない——ローレンスは努力でそれを補った。

前の航海士が置いて行った日誌を見ながら、ローレンスは人一倍働いた。

体を動かしていたほうが、前向きに考えられる、というのもある。

不安と心細さは常にあったが、ローレンスはそれらとうまく付き合う方法を、無自覚に身につけていた。

もともとがきっちりした性格で、細かい作業なども苦にならなかったから、ローレンスは自分の仕事ではなくても、気がついたことがあれば、いやな顔もせずに働いた。

そのおかげで、ほかの乗組員たちともすぐに親しくなったし、そんなローレンスを見て、アストンはひどく満足げであった。

「君はずいぶんまじめなんだな」

航海日誌を書き終え、伸びをすると、タイミングよくアストンが声をかけてきた。

少し前から、ローレンスを観察していたようだ。

「まじめではないと思いますよ。のくは興味のない方面には、さっぱりですから。興味のあることにはすごく熱中するけれど、興味がないと、まったくやる気が出ないときもあります。その中間がないから、お前は極端すぎると、父によく言われていました」

「ほお。だが、天才とはみんな、そういうものじゃないかな？」

アストンがからかうように言ったので、ローレンスは笑いながら答えた。

「それはいいことを聞きました。でも、あなたはぼくのことを、天才というより変人と思っているんじゃないですか？」

「わかるか」

「ずいぶん、はっきりと言っんですね」

「ずけずけとものを言っほどには、親しくなっつもりなんだが」

ローレンスは一瞬、言葉に詰まった。

率直に好意を示されることに、慣れていないのだ。

「こういうとき、なんて答えたらいいのか、わからないんです」

ローレンスがぼそぼそと言うと、アストンは快活に笑った。

「ありがとうと言っておけばいいんだよ」

そんなものなのか……。

またひとつ学んだ気分で、ローレンスは何気なく海に目を向けた。

すると、水平線上の彼方に、大きな船が見えた。

今乗っている船より一回り大きく、とても頑丈そうだ。

商船には見えないが、海賊船でもないようだ。

その証拠に、トレードマークである旗がない。

「ジョージ、あの船は？」

この船に乗ったその日に、アストンが「ミスター・アストン」と呼ぶことを禁じていたので、ローレンスはファーストネームで呼ぶようにしていた。

「どれだ——」

ローレンスの視線の先を見て、アストンの顔からさっと血の気がひいた。

「ローレンス、舵をとれ。今すぐあの船から離れるんだ！」

アストンの切羽詰まった口調から、緊急事態だということはわかった。

ローレンスは甲板を走り抜け、すぐさま、言われたとおりに舵をとった。

その途中で、海賊船がターゲットに近づくと、意図的に旗をおろすという話を思い出した。

ターゲットに気づかれなかったため、十分に近づいたところで突然旗をあげて、慌てさせようとするのだ。

「君がああ船に注目しなかったら、どうなっていたことが……」

船員たちに一通り指示をあたえたアストンが戻ってきて、ローレンスの隣に立った。

アストンはもう、逃げ切れると考えているようだが、ローレンスは険しい顔で風を読んでいた。

「まだ安心できません。——追い風なんです。向こうにとっては。僕たちから見ると、風は真横から吹いています」

アストンははっと顔をこわばらせた。

ローレンスはちらりと海賊船を見た。

いつの間にか旗があげられて、黒い布が風に吹かれてはためいていた。

中央で日本の剣が交差し、右にガイコツ、左に砂時計が描かれている。

まだ距離はあるが、もう追いつけると確信したのだろうか。

ローレンスは舵をとることに集中し、巧みに進路を変えながら、頭

のすみで最悪の事態を思い浮かべてみた。

海賊について、専門的に学んだことはないが、海賊の残酷さについては、いくつも話を聞いて知っている。

そのどれもが、同じ人間とは思えないような話で、共通するのは、海賊の捕虜になったら、二度と自由になれないという点だ。

殺されるか、奴隷として売られるか——殺されたらと考えると、舵を握る手に汗がにじんだ。

恐怖よりも、焦りのほうが強かった。

こんなところでは死ねない。

ローレンスはなにがなんでもこの場を切り抜けてやろうと決心した。

だが、残酷にも、海賊船は着実に距離を縮めてくる。

「危ない！」

アストンの悲鳴のような声が聞こえたかと思うと、ローレンスは強い力で後ろに引つ張られていた。

その直後、パン、という乾いた音が立て続けに鳴り、それまでローレンスがいた場所に穴が二つあいていた。

その後、銃を向けられることはなかったが、状況を理解するのに、数十秒かった。

アストンが腕を引っ張ってくれなかったら、ローレンスは確実に死んでいるか、重傷を負っていただろう。

その事実、頭から冷水をかけられたように、震えが止まらなかった。

だが、現実はやさしくない。

そのショックから立ち直る暇もないまま、甲板で乱闘が始まったのだ。

震える足を叱咤して立ち上がり、周りを見回してみれば、海賊たちが船に侵入していた。

商船の周りに二隻のボートがよせられており、そこから入ってきたのだとわかる。

ローレンスはすぐに近くの階段をおり、武器庫に飛び込んだ。

武器庫といっても、あくまで商船なので、大した威力もなければ数もない。

海賊船が近づいてきたとわかったときに、船員の何人かが武器を持って行ったので、残っているのはマスコット銃が一丁と、長剣が一本だけだった。

ローレンスはそれを両方ともつかみ、再び甲板にかけあがった。

海賊船は、もうすぐそこまで近づいてきていた。

ローレンスが甲板に戻ったとき、丸腰のアストンに、海賊が剣を持つて迫っていた。

ローレンスは迷わず剣を引き抜き、二人の間に割って入った。

高々とふりあげられた剣を長剣で受け止め、その衝撃に顔をしかめながら、ローレンスは一瞬力を抜いた。

相手がバランスを崩し、前のめりになったところへ、脇腹に回し蹴りをいれると、男は脇を押さえて倒れこんだ。

アストンは尻もちをついたまま、ぼうぜんと一連の動作を見つめていた。

しかし、すぐに正気に戻り、すかさず倒れた海賊の腕をつかみ、近くのロープで縛りあげた。

「護身用に持っていてください」

ローレンスはアストンの手にマスコット銃を押しつけて、自分も乱闘のなかに加わった。

体中が心臓になったのかと思うほど、鼓動の音がうるさい。

得意の回し蹴りがきまったことで自信がついたのか、恐怖よりも、湧き立つような興奮を感じていた。

こんなに好戦的な自分は初めてだ。

自分にむかってくる海賊を視界にとらえ、ローレンスは剣を構え

た。

父から教えられ、その後独学で学んだ剣の技は、襲ってくる相手を撃退するぐらいには役に立つ。

しかし、それはあくまで一般人に対してであって、海賊とでは、筋力で負けてしまう。

そこで、ローレンスは片手で相手に斬りかかり、相手がそれを上段で受け止めたときに、腹部ががらあきになる瞬間を見逃さず、蹴りを入れた。

男が膝をついたら、相手の首に手刀をお見舞いする。

そうやって、ローレンスは三人の海賊を気絶させた。

単調な作業ではあったが、疲労は大きい。

疲れて額の汗をぬぐうと、商船の乗組員のなかで、立っているのはローレンス一人だけだった。

死人はでていないようだが、全員が縄で縛りつけられている。

海賊たちが武器を手に迫ってきたので、ローレンスは後じさりした。

その時、船の柱にもたれて、興味深そうにこちらを見つめる男がいるのに気がついた。

たぶん、この場での指揮官は、あの男だ。

長い髪を首もとでひとつくりにしているその男は、組んでいた腕をほどき、こちらに近づいてきた。

ローレンスが冷や汗を流しながら剣を構えると、男は流れるような動きで剣を引き抜いた。

その瞬間、ローレンスは圧倒的な力の差を感じた。

この男は、小手先の技で勝てる相手ではないと、一瞬でわかってしまった。

「斬り合いには慣れていないようだな」

男は澄んだアルトでそう言った。

そして、それに答える間もなく、男の体が前のめりになった。

踏み出した足にぐっと力を入れて、低姿勢のまま突っ込んでくる。

ローレンスは恐れを押し殺して、剣を背後に放り投げた。

男の目が信じられないというように見開かれる。

その一瞬の隙をついて、ローレンスは男の手から剣を蹴り飛ばした。すぐさま背後に落ちた自分の剣を引っ掴んで、男の喉に剣を突き付ける。

男はピタリと動きを止めた。

「このめちゃくちな戦法は、どこで学んだ？」

男は切っ先を気にするふうでもなく、呆れたように尋ねてきた。

自分でも無茶をしたという自覚があったので、ローレンスは苦笑しながら答えた。

「ぼくが自分で考えてみたんです。百パーセントうまくいくとは思ってなかったけれど」

「なるほど、戦略をたててから動くタイプか。だが、経験不足だな」

剣を突き付けられているというのに、男は涼しい顔でローレンスを分析していた。

ハッターリなどではなく、それこそ、経験にもとづく自信によるものだろう。

もともと相手を刺してやろうとは思っていなかったため、剣を突き付けているものの、形だけの構えだった。

だから、背後に迫っている気配に気づかず、首に指を引っかけられて、勢いよく床に叩きつけられた瞬間、ローレンスは簡単に剣を手放してしまっていた。

目の前にちかちかと星が飛び、頭には鈍い痛みが残った。

気づくと、ローレンスは仰向けに倒れていた。

痛みにつめきながら目を開けてみれば、精悍な顔立ちの、浅黒い肌の男が、冷たい目でローレンスを見下ろしていた。

ローレンスはぞくりとした。

黒い髪をオールバックにした男は、険しい顔つきで、大振りの長剣をローレンスの首に押し当てたのだ。

もちろん、ただの牽制ではない。

「レイモンド、血が出てる。少し剣を離してやれ」

長髪の男がローレンスに蹴り飛ばされた剣を収めながら、非難するように言った。

「そいつはまだ子どもだ。船長の言葉を忘れたのか？」

「覚えている。女子どもには手を出すな、だろ。」

だが、こいつは剣を手にとった。

それなりの覚悟があるってことだろう？

俺は、ガキだろうが容赦しないぜ」

レイモンドと呼ばれた男は、危険な笑みを浮かべた。

筋肉質で野性的な男に似あいの、背筋が凍るような笑い方だ。

レイモンドと長髪の男は、黙って互いを見つめあった。

「おい、なにを手こずっているんだ」

突然、深いバリトンの声が沈黙を破った。

目だけを動かして見ると、男が一人、こちらに近づいてくる所ろだった。

その背後では、数十人の海賊たちが乗り込んで、金目のものを強奪している。

バリトンの声の持ち主は、海賊たちのなかでも、特に目立っていた。

強烈な存在感を放つその男は、海賊の船長が着ていそうな、赤いフロックコートを肩にかけている。

見た目どおり、この男が船長なのだろう。

「船長」

長髪の男が呼びかけると、男はそれを手で制し、ローレンスの横に膝について、顔をのぞきこんだ。

海賊船の船長は、意外なことに、面白がるような笑みを浮かべていた。

「双眼鏡で、俺も見ていた。小手先の技、といえばそうだが――面白い戦い方をするじゃないか。」

なにより、うちの斬りこみ隊長を追い詰めるとは、たいしたガキだ」

その言葉を聞いて、レイモンドは舌打ちしながら剣を引いた。

「クロード、お前はいいのか」

レイモンドが長髪の男に声をかけた。

「俺も船長と同じ意見だ。なかなか、面白い展開じゃねーか」

レイモンドは肩をすくめ、乱暴にローレンスを立ち上がらせた。

こうして隣に立ってみると、レイモンドはかなり背が高かった。

レイモンドの横顔を見上げていると、目が合った。

「良かったな、坊主。殺されずに済んで」

本当に、そのとおりだ。

「ありがとうございます……」

「のんきな奴だな。死ぬよりえげつない目に遇わされるかもしれないぞ」

「生きてさえいれば、いいんです。

ただ、この乗組員たちには、ひどいことをしないでください。
お願いします」

ローレンスは三人の海賊たちに頭を下げた。

そうすることに、プライドが傷つくとか、そういうことはなかった。

アストンたちの状況が少しでも良くなるなら、そうしたい。

それぐらい、ここで過ごした時間は、ローレンスにとって大切なものになっていたのだ。

海賊の船長は値踏みするようにローレンスをじろじろと観察した。

「いまどき珍しいガキだな。甘いが……そういう奴は、嫌いじゃない。」

お前、名前は？ 俺はファム・ファータル号の船長をやってる、ジェラルド・バルタードだ」

「ローレンス・ランズマンです」

「ランズマン？ あの冒険家の、息子かなにか？」

ジェラルドが意外そうに眉を動かした。

その反応は、アストンや他の船員たちが見せたものとは、明らかに違っていた。

「父を知っているんですか？」

「友人というほどじゃあないが、二、三度顔を合わせたことがある。あいつは、遺跡や宝があるところなら、どこにでも現れたからな」

ジェラルドは懐かしそうに言い、そういえば、とローレンスに視線を戻した。

「最近は、見ていないな。あいつはどうしている？」

ローレンスは一瞬目をさまよわせた。

口にするたびに、胸に鉛を流し込まれるような気になるのだ。

「数週間前に、亡くなりました」

「——そうか」

ジェラルドの顔から表情が消えた。

だが、その瞳の奥で、激しい炎がちらついたように見えた。

ローレンスがその目をじっと見ていると、ジェラルドはふっと表情を和らげた。

ちらりと見えた激しい一面は、すでに消えている。

「それで、どうしてお前が商船に乗っているんだ。

海賊船に襲われる危険性くらい、知っていただろうに」

「情報収集のためです。色々な場所を旅すれば、父の死について、なにかわかるかと思って——」

ジェラルドは思案するようにあごに手をあて、なにもない一点を見つめたが、すぐに口を開いた。

「ここの乗組員には手を出すなと言ったな。

商品や金は頂いていくが、お前が俺の船に乗ると——海賊の一員になると誓うなら、人間には手出しせずに、退いてやってもいい。どうする、ローレンス」

「かまいません。

でも、ぼくを船に乗せて、あなたになんのメリットがあるんですか？」

「メリットならある。色々とな」

そう言って、ジェラルド・バルタードは海賊らしい、すごみのあふれる笑みを浮かべた。

第一幕(3)(前書き)

ローレンスが正式に海賊として認められるまで。

第一幕(3)

「もたもたしてんな」

海賊船に乗り込もうと、船によじのぼろうとしていると、レイモンドに腕を引っ張りあげられた。

乱暴だが、海賊船は商船よりもずっと大きく、かなり登りにくかったので、手を貸してくれたのだとわかる。

あまり良い出会い方をしなかったの——なんといっても、ローレンスを斬り捨てようとしたのだ——嫌われているだろうと思っていたぶん、ちよつとした気遣いに驚いてしまった。

それが顔に出ていたらしく、レイモンドはにやりと笑った。

「さつきまで、俺とおまえは海賊とその捕虜だった。だが、今は同じ船の仲間だ。

——歓迎するぜ」

切り替えの早さに戸惑いつつ、ローレンスはよろしくお願いします、とまじめに答えた。

その受け答えが気に入ったらしく、レイモンドはくせのある笑みを浮かべた。

もう切っ先を向けられることはないとわかっていても、肉食獣を前にした小動物のような気分になる。

ローレンスは離れていく商船を振り返った。

アストンにとっては大損害だろうが、命が助かっただけでも良しとしてもらいたい。

レイモンドについて船内を見回していると、さっきの長髪の男が近づいてきた。

背はすらりと高く、ローレンスより少し背が高いが、レイモンドのように筋肉質というわけではなく、どちらかといえば細身だ。

首元で一つに括った髪は女性のように柔らかだし、ハンサムというよりは美人の類で、ローレンスは思わずどきりとしてしまった。

「よろしく、ローレンス。隊長のクロードだ。
君の隣にいる男も隊長だけだな」

レイモンドが頷いた。

「隊長は三人いる。もう一人は後で紹介してやるよ」

ローレンスはクロードと握手し、控え目に尋ねた。

「よろしくお願いします。あの……女性、ですよね？」

「さすがに、握手するとはれてしまうな。

まあ、別に隠しているわけじゃないから、気にしなくていい」

クロードは気分を害したふうでもなく、快活に笑った。

「女の格好で、海賊はやってられないからな。どうしても、敵になめられてしまう」

「それも、ある意味武器になるけどな。気を抜いてうかつに近寄ると、ばっさりだ」

レイモンドが喉をかき切る仕草をした。

それを見て、クロードが大仰そうに顔をしかめた。

「俺はそんなに物騒か？」

「物騒の代名詞みたいなやつが、なにを言ってるんだ」

レイモンドが渋い顔をして言った。

そんな二人のやり取りを見ていて、ローレンスは純粹に楽しいと思った。

状況が目まぐるしく変わり、なりゆきで海賊になってしまったというのに、ローレンスは早くもこの場に馴染み始めていた。

これが他の海賊船だったらと考えると恐いが、「運が良かった」で片づけることにしよう。

「よし、新人君を部屋に案内するか。おいで、ローレンス」

クロードが手招きをした。

「はい。あ、いつてきます」

「おう。いつていい」

レイモンドに軽く会釈して、今度はクロードについていった。

まずは、食堂や談話室など、皆で集まる場所を中心に案内してもらうことになった。

クロードは海賊とは思えない丁寧さで、説明の合間に、海賊のルールについて教えてくれた。

突然の戦闘で疲れていたが、こうして、船内を案内してもらったり、色々することがあるというのは、ローレンスにとっては救いだっ
た。

レイモンドは「仲間」だと言ったが、いまいち、自分の立ち位置がつかめないのだ。

この船には腕のいい操舵手がいるし、ここでのローレンスは、無価値に等しい。

なにも言われなければ、船内の掃除などの雑務をさせてもらおうか……。

そんなことを考えながら、クロードと細い通路を歩いていると、前から赤毛の男の子がやってきた。

ローレンスと同年くらいで、可愛い顔をしている。

この子も男装をしているのだろうか？

「あんたが、船長の言ってた新人？」

思った通り、その子の口から、女の子特有のソプラノが出てきた。

屈託のない笑顔につられて、ローレンスも肩の力を抜いた。

「よろしく。ぼくはローレンス」

「あたしはアンナ。あんたが来てくれて、本当に嬉しいよ。
この船は大人ばかりだから、なにかと子ども扱いされてさ」

「お前が無茶をするからだ。アン、ローレンスはお前と同室だから、案内してやれ。」

俺はそろそろ、自分の仕事に戻る」

「わかった。しっかり案内するよ」

クロードに礼を言って別れると、アンナは楽しそうに部屋までローレンスの手を引いた。

「ほら、ここだよ。ちょうど、ベッドが一つあいてるから。荷物はその周りにでも、てきとうに置いてよ」

「わかった」

荷物を床に置き、ローレンスはベッドの端に腰をかけた。

ハンモックか、最悪の場合、床で眠る覚悟をしていたのだが、ずいぶん恵まれた環境だ。

装飾品はほとんどなく、質素な部屋だが、書き物するのに使いやすそうな机と椅子までそろっている。

ローレンスはしばらく部屋を眺めていたが、アンナの強い視線を感じて、そちらに向き直った。

「なに？」

「ずいぶん落ち着いてるんだなって思ってたさ。

あ、もちろん、寛いでくれていいんだよ。

でも、さっきレイモンドに斬られそうになったって聞いたから、もっと動揺してるかと思った」

「色んなことが一気に起きて、反応できてないだけだよ。

ねえ、少し聞きたいんだけど、君も海賊なんだよね？

普段はなにをしてるんだい？」

「雑用ばかりだよ。船内の掃除とか、料理の手伝いとか。怪我人がでたときは、ドクターの手伝いとかもするよ」

「じゃあ、ぼくもその手伝いをさせてもらおうかな」

「たぶん、そうなると思うよ。

隊長以下の船員は、全員二人一組で働くんだ。お互いに世話ができるようにね。

あとでクロードが色々と説明してくれるよ。

それと、今晚は楽しみにしてなよ。

新人の歓迎会をやるからさ」

「そんなことまでしてもらえるの？」

ローレンスが驚くと、アンナはにっこり笑った。

「もちろん。海賊の『仲間』っていうのは、『家族』と同じ意味なんだ。

荒っぽい奴ばかりだけど、みんないい奴だからさ。よろしくやってよ」

「うん。家族 か……いいな」

ローレンスが目を細めると、好奇心旺盛なルームメイトはローレンスの隣に座って、じっとこちらを見つめた。

「夕食まで時間あるし、あんたの話を聞かせてよ」

「そうだな……ウィリアム・ランズマンって知ってる？」

「冒険家の？」

「そう。数週間前に亡くなったんだけど、ぼくはそのウィリアム・ランズマンの息子で、父の死について詳しく知りたいんだ。

だから、世界中を回る商船に乗りこんだ。

その後は——君が知っているとおりだよ」

一瞬間が空いた。

妙だなと思ってアンナの横顔を見ると、困ったような顔で、言いくそずにしていた。

なにかあるのだろうかと不安に思ったが、アンナが氣遣わしげに尋ねてきた。

「今なら、頼み込んだら、さっきの船に戻してくれるかもしれないよ？」

あたしも一緒に頼もうか？」

ああ、そういうことかと、ローレンスは微笑んだ。

海賊船に引っぱりこまれたことで、ローレンスの目的が果たせなくなるのではないかと、心配してくれているのだ。

「ありがとう。でも、大丈夫だ。

世界中を回るなら、それが海賊船に変わっても気にしないよ。

むしろ、こっちのほうがいいかもしれない。

父の友人たちが情報収集してくれたんだけど、さっぱりだったんだ。それなら、ちよっと違う方向からアプローチしてみるのも、いいかもしれないだろ？」

「なんていうか――」

アンナが驚いたように目を丸くした。

「なに？」

「度胸があるんだね。

海賊船に乗って、平然としていられる人間ってあんまりいないよ」

「今のところ、痛い目にはあってないから」

「ふうん。インテリタイプのお坊ちゃんかと思ったけど、変わってるね」

ローレンスは声を漏らして笑った。

「よく言われる」

「そういえば、あんた、強いんだってね。」

うちの斬り込み隊長を追い詰めたって、みんな感心してたよ」

アンナが目を輝かせるので、ローレンスは困って、髪をくしゃくしゃにした。

「あれは、あの人が手加減してくれたからだよ」

「それはあるかもね。クロードは女子どもには絶対に手をあげないから。」

でも、今まで普通の生活をしていて、海賊に剣を向けるっただけでも、すごいよ。」

無鉄砲、っていうのかもしれないけど」

「それも、よく言われる」

二人して笑っていると、扉がノックされて、クロードが顔を覗かせた。

「二人とも、船長室に来てくれないか」

言われた通りについていくと、船長室には、船長のジェラルドの他に、レイモンドと茶髪の男が控えていた。

ジェラルドがにやりと笑い、指でローレンスとアンナを呼んだ。

机を挟んで向かい合っていると、ローレンスに二枚、アンナに一枚の羊皮紙が手渡された。

「契約書 シャッス・パリティ にサインしてもらうぜ、ローレンス。」

正式にうちの乗組員として認めるために必要な書類だ。

もう一枚は、アンナの持っているやつと同じだ。

大まかに言っと、互いを相棒とし、助け合うことを誓いますって内容だ」

ローレンスは二枚の紙にざっと目を通した。

遺言書の形式になった誓約書で、最後にサインを書く場所がある。

ローレンスが羽根ペンを手にすると、ジェラルドに腕をつかまれた。

顔をあげると、思いがけず、真剣な目にぶつかった。

「海賊は情報収集するにはうってつけだろう。」

様々な国へ行き、情報の行きかう酒場に出入りする上に、冒険家が行きそうな場所にも立ち寄るからな。

だが、これだけは覚えておけ。

海賊船ってのは、商船に乗るより、はるかに危険だ。

無意味な殺人はしない点、うちは他の海賊どもよりきっちりした組織だが、仁義を掲げたところで、俺たちが逆賊であることに変わりはない。

海軍に捕まりゃ、確実に処刑される。

それでもお前は、この船の乗組員に——海賊になると誓えるか？」

ローレンスは無意識に唾を飲み込んだ。

ジェラルドの言葉は、それだけの重みがあった。

修羅場をかくぐってきた男の目を、ローレンスはまっすぐに見つめ返した。

簡単なことではなかったが、直感で、目をそらしてはいけないと思った。

ローレンスにどれだけの覚悟があるか、ジェラルドだけでなく、この場にいる幹部全員で見定めるつもりなのだろう。

それに対して、自分の覚悟を、言葉で示さなければならない。

そうでなければ、ただのお荷物か、最悪の場合、奴隷として売りさばかれるだろう。

本当に自分は、そこまでする必要があるのだろうか？

ローレンスは自問自答してみた。

引き返すなら、今だ。

後味の悪い思いをするかもしれないが、死の真相を知るために自分が死ぬなんて、本末転倒だ。

真実を知るために、果たして命を賭ける必要があるだろうか？

ローレンスの頭の中に、父の後姿が蘇る。

ローレンスは唇を噛んだ。

答えは——イエス、やはり、イエスだ。

家に戻ってきたと思ったら、すぐにまた旅に出てしまう父は、父親としては立派ではなかったかもしれない。

だが、ローレンスのほうも、止めようとは思わなかった。

父は自分の冒険家という肩書に誇りを持っていたし、冒険について語る時の父は、誰よりも輝いていた。

ローレンスはそんな父に憧れていたのだ。

父親としてではなく、一人の男として、彼を尊敬していた。

父と旅に出ることはもう叶わないが、彼と同じ道を進むことはできる。

それが例え、普通の人から見て非合法だったとしても。

ローレンスは、覚悟を決めた。

「さつきは情報収集のためだと言いましたが、気持ちが変わりました。

ぼくは、冒険家であった父を越えたいし、もっと色んなことを知りたい。

そのためなら、命を賭けてもいいと思ったんです」

ジェラルドは頷き、手を離れた。

「長く平凡な人生より、短くても輝きのある一生を——これは、お前の親父さんの言葉だ」

ローレンスが羊皮紙にサインし終わると、ジェラルドはその紙を引き出しの中にしまった。

「なかなか、わかってるじゃないか。
お前は海賊に向いてるかもしれないぞ」

ジェラルドは柔らかくほえんだ。

「改めて言おう。

ようこそ、ファム・ファータル号へ」

ローレンスとジェラルドは、かたく手を握り合った。

「よし、それでは、宴会の用意を始めるぞ。
最近、極上の酒を手に入れたんだが、それをあけてみるか」

ジェラルドの一声で、脇に控えていたレイモンドと茶髪の男が動いた。

茶髪の男は、ローレンスの肩に手を置き、またあとでな、とだけ言
って部屋を出ていった。

「あいつが、もう一人の隊長だ。名前はルドウィゴ。」

十の顔を持つ男　と呼ばれている」

「ルドウィゴは変装の名人なんだよ。

時々、情報収集のために船を下りることがあるから、今度一緒に連れていってもらいなよ」

クロードの言葉に加えて、が説明してくれた。

「へえ……後で話を聞いてみようかな」

「そうしなよ。さて、あたしも宴会の準備を手伝おうかな」

「それじゃ、ぼくも……」

「君は部屋でゆっくりしている。
色々あって、疲れただろ？」

それに、君の歓迎会なんだから、手伝いなんかしないでいい」

ローレンスはそれでもなにか手伝ったほうがいいのでは、と思ったが、口を開く前に二人に背を押され、部屋に放り込まれてしまった。

荒っぽいところは海賊らしいといえるが、どこか温かみがあって、親しみが持てる。

ローレンスはベッドの上に横になったが、先ほどの戦闘で、体のほうはまだ興奮状態だった。

寝返りを何回かうつたあと、ローレンスはむくりと置きあがって、自分の荷物から日誌を取り出した。

そして、海賊船の襲撃と、海賊に仲間入りした今の状況を、詳しく書きとめた。

商船が海賊に襲われたり、その乗組員が海賊になることは珍しい話ではないが、自分で体験すると、これが自分の身に起こったことは信じがたい。

なるべく自分の感想を省きながら、ローレンスは冷静に分析し、数十分後にようやく日誌を閉じた。

そして、ふと、もう一冊の日誌の存在を思い出した。

忘れた瞬間などなかったが、ずっと後回しにしていたものだ。

ローレンスは父の書斎から持ち出した、唯一の遺品を取り出した。

改めて見ると、ずいぶん分厚いが、まだ一ページも読んでいない。

商船での生活に慣れるまではと、心のどこかで、自分に言い訳をしていたのだ。

だが、もうこれ以上はのばせない。

最後のページをあけてみると、日付は今から半年前になっていた。

最後に父と会ったのがその一ヶ月後だから、あの時書斎に置いていたのか、とローレンスはその時のことを回想した。

そして、恐る恐る最初のページに戻った。

綺麗な字で、“シック・パルヴス・マグナ（小さな出発から偉大さへ）”と書かれており、なんとも父らしい始まりだと、ローレンスは顔をほころばせた。

ローレンスは慎重に読み進めてったが、恐れていたようなことにはなにも書かれていなかった。

几帳面な父らしく、自分が訪れた土地や住民の特質や、新しく見つけた植物について詳しく記述されていた。

面白いし、非常に興味深いが、どこか腑に落ちない。

ローレンスはページをぱらぱらとめくり、流し読みしたが、やっぱり普通の旅の記録にしか見えない。

不安をあおるような遺言から、陰謀や危険な裏組織の存在を心配していたのだが――。

ローレンスはため息をついて、ベッドに寝そべった。

家を燃やすというのは、単に、広い世界を知らない息子を、あの空間から解放するための手段にすぎなかったのかもしれない。

ウィリアム・ランズマンの死について情報が入ってこないのは、自然災害に巻き込まれたからで、そこになにか不審な点があると考えってしまうのは、ローレンス自身が危険な冒険に出るきっかけを欲しがっていただけかもしれない。

そう考えれば、説明はつく。

だが、ローレンスは、自分がそんな理由では納得できないとわかっていた。

それに――。

ローレンスはバンダナをほどいて、手鏡で額を映した。

鱗のような痣――フォスター博士に言わせると、人魚の呪い――について、まだなにもわかっていない。

正直に言って、ローレンスはこれが呪いだとは信じていなかった。

なにか、害のない程度の疾患ぐらいに考えているのだ。

神秘的なことを信じる気持ちは好きだが、ローレンスの物事の判断基準はあくまで、根拠のある現実的なものなのだ。

実際、この傷が痛んだことは、最初の一回だけで、生活に支障はない。

アストンの商船に乗る前に、街の医者に検診してもらったが、痣のことも含めて、体に問題はないと言われ、その後は特に気にすることとはなかった。

父の背にも同じ痣があるというのは不思議だが、呪いだと悲観する気にはなれない。

ローレンスは父の日記を枕の横に置いて、目を閉じた。

焦って考える必要はない。

ようやく冒険に出ることができたのだから、まずはそれを喜ぶべきだ。

「ローレンス、皆集まってるから、行こう」

足音が近づいてきたかと思うと、アンナが扉から顔を覗かせた。

「わかった」

ローレンスは頭を切り替えて、アンナと一緒に甲板に出た。

ローレンスが甲板に姿を現すと、見るからに荒っぽい男たちが、いつせいにこちらを見た。

圧倒されてしまいそうだが、どれも親しげな視線で、ローレンスは委縮せずにすんだ。

テーブルには豪勢な食事が並び、ここが海の上であるとは思えないほどで、そのそばには大きな酒樽がいくともある。

「全員で二十五人。女はあたしとクロードの二人だけよ」

アンナと一緒に、男たちの輪に近づいていくと、拍手と口笛に迎えられた。

「歓迎するぜ、兄弟」

「兄弟？」

「そうさ、俺たちは 海の兄弟 なんだ」

なるほど、とローレンスは頷いた。

「俺の隣に來いよ、ローレンス。光榮だろ？」

船長のジェラルドが手招きしながら言った。

ジェラルドの隣にいくと、がしつと肩をつかまれた。

「聞け、野郎ども！ ここにいるローレンス・ランズンマンは、今日から俺たちの仲間になった。

まだガキだが、こいつは一人前の剣術士だ。歓迎と敬意を表して乾杯しようじゃねえか！ なあ？」

とたんに割れんばかりの大声があがり、ローレンスは目を丸くしながら、くすぐったさに声をあげて笑った。

「ほら、お前も」

レイモンドがゴブレットにワインをついでくれた。

「ありがとうございます」

それを見届けて、ジェラルドが声を張り上げた。

「乾杯！」

そこからは、文字通り飲めや歌えやの大騒ぎだった。

今まで大勢で騒いだことすらなかったローレンスは、どうやって騒いでいいのかわからなかったが、幸い、誰かがひっきりなしに話しかけてくれた。

最初はジェラルドと海の知識について話し合っていたが、ジェラルド一人がローレンスを独占できるわけもなく、別のテーブルに引っぱって行かれた。

「隣に座れよ。お前、酒は飲める口か？」

船長室で見かけた茶髪の男——ルドウィゴが、自分の隣の椅子を叩いた。

「たしなむぐらいなら」

「海賊船にいれば、すぐに強くなるぞ。アルコール中毒は海賊の職業病みたいなもんだからな」

ゴブレットの酒を一気に飲み干してから、ルドヴィゴはにと齒を見せて笑った。

「もう聞いたと思うが、俺は隊長の一人、ルドウィゴだ」

「情報収集をしていると聞きました。あと、変装の達人って話も」

「おう。今度、変装のコツを教えてやるよ。ところで、その敬語はやめてくれないか。

俺たち海賊に上下関係はないんだ。一応、船長と操舵手 クォーター・マスター には丁寧語を使うこともあるけどな」

「でも、ぼくより年上なのに……」

「年功序列もない。それに、お前の年頃から礼儀なんか気にしてたら、疲れるだろうが」

ローレンスは笑った。

お酒がまわってきたのかもしれないし、この楽しい雰囲気感化されたのかもしれない。

「わかった。慣れないけど、敬語はなしだね」

「そうだ、素直なのはいいことだ」

「談笑中に悪いが、そろそろ私にも自己紹介をさせてくれないか」

ローレンスの隣に、黒髪の男が座った。

黒い眼帯が、いかにも海賊という感じで、印象的だ。

知的で冷静沈着、荒っぽさよりも気品を感じさせた。

「おう、すまないね。どうぞ。俺はクロードと一杯やってくるよ」

ルドウィゴは鼻歌を歌いながら席を立った。

「私は操舵手 クォーター・マスター のシルヴィオだ。」

ルドウィゴも言っていたが、私に対しても敬語は使わないでくれ。いいな？」

「わかり……わかった」

ローレンスは思わず舌を嚙んでしまった。

ルドウィゴは明るくて愛想がいいから、あまり緊張しないが、シルヴィオは違った。

海賊船における船長は、戦闘や緊急時以外は口を出さない。

代わりに、操舵手 クォーター・マスター が代表として全てを取り仕切ることになっており、今ローレンスの目の前にいる男は、まさにその役割に適していた。

「まあ、ゆっくり慣れてくれればいい。

……悪いな、騒がしい連中ばかりで」

「でも、いい人たちだ」

「まだこの船に乗ったばかりなのに、わかるのか？

今陽気なのは酒を飲んでいるからで、本性は泣く子も黙る残虐な海賊かもしれないぞ」

「適当に言ったわけじゃありませんよ。

乗組員同士の会話を聞いていて、すごく仲がよさそうだと思ったんです。

他人と仲良くできる人に、残虐な人っていないと思うんですよ」

「ほお。面白い答えだ。海賊を恐がらない、その度胸もいい。だが、適応能力があるのかないのか、わからないな。

とりあえず、もつと砕けた話し方をしてくれないか」

「あ、すみま……ごめん。敬語のほう話が話しやすくて」

「ゆっくり慣れてくれ」

さっきと同じことを言っ、シルヴィオは笑った。

シルヴィオはそれからもしばらく相手をしてくれたが、そのうち他の船員に引っぱっていかれた。

ローレンスはゴブレットを置いて、人気のない端まで歩いた。

顔が火照って暑かったが、お酒のせいではない。

アストンの商船に乗っていたときも、乗組員たちとは上手くやっていたが、こんな高揚感はなかった。

大勢で騒ぐことがこんなに楽しいとは知らなかった。

それは、ローレンスにとって、とても大切な発見だった。

第一部(4)(前書き)

船での生活にも慣れたローレンス。
ある日、ライバル船との戦闘中に、海に落ちてしまう。
その時、ローレンスを助けたのは……。

第一部（４）

ローレンスは汗で濡れた前髪をかきあげた。

肉体労働という点では、商船も海賊船も変わらない。

濡れたロープを手に、マストの上に登って、重たい帆布を調節する。

この労働のつらさに海賊業をやめる人もいるらしいが、なるほど、これはきつい。

ローレンスはマストからおりて、一息ついた。

太陽はすでに水平線のむこうに沈みかかって、海をオレンジ色に染めている。

「お疲れ」

アンナが近寄ってきて、水をくれた。

そのアリエルも、さっきまでポンプを一時間近く押し続けていたため、少し疲れた顔をしている。

しかし、こんなものは序の口で、二人にはまだ別の仕事が待っている。

「それじゃあ、あたしはドクター・イヴオンのところに行くからね」

アンナは手をひらひらと振りながら、階段をおりていった。

アンナは外科医助手　ロブロリ・ボーイ　という肩書を持っており、普段は雑務に加えて、船医であるドクター・イヴォンの手伝いをしている。

そして、海賊船に乗って二週間、ローレンスにも役割が与えられた。

海図を編纂し、読み解くことができるとわかると、ローレンスは“海の技術者”として認められた。

主な仕事は、操舵手の手伝いで、立場的にはアンナと似ている。

ローレンスも濡れた手を拭いて、シルヴィオの部屋を訪ねた。

「入るよ」

ローレンスがノックすると、すぐに返事があった。

海賊船の規律として、ドアに鍵をかけてはいけないことになっているので（隠しことをしないためだが、隠しことがどれだけ重大な罪かを知り、ローレンスは驚いた。レイモンドに聞いた話によると、仲間隠れて財宝をくすねた乗組員は、びん一本の水と銃だけ与えられて、孤島に置き去りにしてしまうらしい。脅しではなく、本当にやってしまうのが海賊だ）、そのままドアノブを回して部屋に入った。

テーブルの上には物が散らばっていた。

地球儀や羅針盤、アストロラーベ（天体観測儀）に砂時計、海図、

分度器……。

ローレンスにとって、大切な仕事道具だ。

ローレンスはシルヴィオの向かい側に座り、早速、ペンを手に取り、水先案内書を片手に作業にとりかかった。

「ずいぶん慣れてきたみたいじゃないか。口調もずいぶん柔らかくなった」

地球儀にコンパスをあてながら、シルヴィオが言った。

滅多なことでは表情を動かさないシルヴィオだが、この時、少しだけ笑っているように見えた。

珍しいこともあるものだ、ローレンスは顔に出さずに驚く。

この二週間で、シルヴィオがどういう人間なのか、だいたいわかった。

もともと陽気な性格ではないようだが、彼は操舵手として乗組員をまとめるために、普段から平常心を心がけている。

シルヴィオが口を開けて笑うところを、ローレンスはまだ見たことがなかった。

「自分ではあんまりわからないけど、前より心が軽くなった気がするよ」

「そのうちお前も、あいつらに混じってバカをやるようになるさ」

「シルヴィオは？　あなたがハメを外すところなんて、想像できないけど」

シルヴィオはわずかに首をかしげた。

「あんまりやらないな。だが、表情に出ないだけで、私だって浮かれることはある。」

お前、私をいくつだと思っている？」

「うーん、三十歳前半？」

「……二十五だ」

「えっ、それは……ごめん」

シルヴィオは小さく声を出して笑った。

今日は機嫌がいいのかもしれない。

「三十歳を超えて海賊を続けているやつは、滅多にいない。」

うちの船長が珍しいんだ。普通、海賊になるのは十代の後半から二十代前半で、十年以上も海賊業を続けることはない」

「どうして？」

「海よりも陸のほうが、楽に生きられるからな。」

海賊業で財産を蓄えたら、陸に戻って、どこかに家を建てる奴が多い。

つまらんが、潮時をわかまえるのは臆病とは違う」

なるほど、とローレンスは相槌を打ち、さらにいくつか質問した後、二人は自分の作業にかかりきりになった。

しばらくの間、部屋の中は静寂が続いた。

作業の音や、時折聞こえてくる船員の足音以外には何も聞こえない、穏やかな時間だ。

それが、突然の爆音で破られた。

ローレンスとシルヴィオは同時に立ち上がった。

船のすぐ近くに、大砲が撃ち込まれたのだ。

顔を見合わせ、海図を放り出して甲板にかけあがった。

すでにほとんどの船員が所定の位置についていた。

ローレンスは素早く四方を見渡し、一隻の船を見つけた。

海賊船だった。

「ちっ、また奴らか」

シルヴィオが面倒臭そうに言った。

だが、どこか緊張感に欠ける。

舵を取るため、歩き出したシルヴィオとは離れて、ローレンスはア

ンナのそばに駆け寄った。

こちらも、短刀カトラースを抜いているが、のんきに布で磨いていた。

「ねえ、なんでそんなに落ち着いているんだい？」

あの海賊船、大砲を打ってきたんだよね？」

「あそこは本気でかかってこないから、いいんだよ。
大砲は、訪問のベルを鳴らす感覚なんじゃないかな」

ローレンスはいまいち理解できず、レイモンドとクロードの姿を探した。

すると、彼らは海賊船が近づいてくるのを、今か今かと待ちわびているようだった。

剣を引き抜いて、すでに戦闘態勢にはいつている。

しかし、顔は子どものように輝いていた。

ますます訳がわからず、ローレンスは二人に声をかけた。

「なんだか、みんな様子が違うんだけど？」

「あそこに見える海賊船は、ラッカー海賊団 といって、俺たちのライバル船だ」

クロードが楽しそうに答えた。

「ラッカー…… 難破させる者？」

「おう、あの船の連中は強いぜ。数々の海賊船を沈めてきた強者ぞういだが、うちだけは倒せなかった。

それで、こうやって、時々ケン力を売りに来るんだが、どうやら気に入られたみたいでな。

命を狙ってくることはないから、練習試合と思っておけ」

どうやら、敵ではないようだ。

とりあえず、ローレンスも武器を手を取った。

海賊の一員として、ローレンスは船長から二挺のピストルと二本の剣を与えられている。

ローレンスは肩にかけた吊革の端に二挺のピストルをつるし、剣を引き抜いた。

やがて、海賊船がぎりぎりまで接近し、戦いが始まった。

そして、ローレンスはさっきの答えの意味を知った。

ラッカー海賊団は剣を手に殴りこんできたが、誰もピストルを持っていなかった。

ローレンスのところにも、同い年くらいの少年が斬り込んできた。

「アンタ、新入りだな！」

剣で攻撃を受け止め、力での押し合いになった。

顔を間近に寄せて、少年は引き絞るような声で言った。

「シルヴィオと同じタイプか」

「どういう意味？」

「必要以外、戦うのは好きじゃないだろう。
アンタには闘志が見えないぜ」

その言葉に、なぜか胸が熱くなった。

今まで無意識のうちに抑えていた闘争心だとか熱い衝動だとかが、
一気に噴出したようだった。

ローレンスは目つきを変え、真剣に打ち合うことにした。

この二週間、レイモンドとクロードの両方に鍛えられたのだ。

負けたくないし、その成果を出し切りたい。

「いいぜ、その目！　それでこそ海賊だ」

少年は嬉しそうに笑った。

そこから、周囲が注目するほど苛烈な打ち合いが始まった。

一瞬も息をつけないのに、ローレンスの胸から湧き上がるのは、歓
喜の気持ちだった。

ローレンスははじめて、好敵手というものを見つけた。

そのことに、どうしようもないくらい闘志がわきあがって、剣を持つ手に力がこもる。

一対一の斬り合いは、思いのほか長引いた。

ラッカー海賊団 が乗りこんできたとき、すでに陽は沈んでいたが、今はもう暗く、完全に夜になっている。

ローレンスと少年は互いに剣の切っ先に傷つき、所々血を流していた。

ローレンスが少年の頬に一筋の傷を作ったとき、少年がこれとどめとばかりに、胸に飛び込んできた。

素早い動きに反応しきれず、ローレンスは思わず飛び退った。

そのとき、誰かが叫んだ。

「危ない！」

ローレンスが状況を理解するまえに、ローレンスの体は重力に従って落下していた。

後ろを確認しなかったのがいけなかったらしい。

ローレンスは頭からまっさかさまに、海に落ちてしまった。

体が海面に叩きつけられ、鼻から海水を吸いこんでしまい、頭が混乱する。

ローレンスは海面に顔を出そうと、必死に手をばたつかせた。

だが、息がもたない。

急速に思考がにぶくなっていくのがわかる。

肩にかかった二挺のピストルと服が重りになって、ローレンスの体はどんどん沈んでいく。

ローレンスは肩にかけた吊革とブーツを脱ごうと、やっきになったが、焦れば焦るほど、指がうまく動かない。

もうだめだと思ったとき、誰かの手が肩にかかった。

目が染みるので開けられないが、女の子の手だ。

（落ち着いて、ゆっくり息をして）

耳元で、聞いたことのない声が囁いた。

そんなことをしたら死んでしまうとか、なんで海中で声が聞こえるんだ——と思う前に、ローレンスは言われた通りにしていた。

ゆっくりと、半信半疑で息を吸う。

すると、信じられないことに、息ができた。

だが、海中で長く目を開け続けたせいで、頭痛がする。

（目は、人間の目なのね）

これは夢なのかと、ローレンスは自分の耳を疑った。

（ここから流されたとしたら、近くの無人島に着くわ。

あなたの船の航海士は、それを読んで、明日の朝にでも迎えに来てくれると思う。

その無人島まで、連れて行ってあげる）

片方の腕が引っぱられ、ローレンスはされるがままになっていた。

これが現実なのか、夢なのかわからない。

しかし、恐いとは思わなかった。

ローレンスは少しだけ目を開けた。

そして、思わず目を見開いてしまった。

予想通り、自分の手を引いているのは少女だったが、彼女には、足の代わりに魚の尾があったのだ。

半人半魚、セイレーン、人魚……言い方はどれでもいい。

ローレンスは急に心臓がどきどきしてきた。

人魚は今も海賊や船乗りの間で信じられている。

しかし、最近の学会では、古くから人魚と呼ばれているものは、マナティーやアザラシの類だという説が一般的になっている。

それに対するローレンスの意見は、微妙だった。

後者のほうが説得力はあるとは思うが、人魚についての資料（なぜか、家の本棚にはこういつた本がたくさんあった）を読んでいると、本当にいるのではないかと思うのだ。

それが、今、目の前にいる。

ローレンスはやる心を抑えて、腕に触れている手に、自分の手を重ねた。

すると、それに応えるように、腕をつかむ手に力がこもった。

（もう少しよ。ほら！）

突然、体が上昇して、海面に顔が出た。

ローレンスはずぶ濡れになったシャツを絞り、かがんで、そばにいる人魚をまじまじと見つめた。

「君、人魚？」

少女はにこつと笑った。

長い黒髪が、水できらきらと光っている。

「どうしてぼくを助けたの？」

少女はすつとローレンスの額に触れた。

正確に言つと、バンダナで隠した痣に。

「この痣……？」

少女は何も話さない。

ローレンスは少女の藍色の目をのぞきこんだ。

「もしかして、陸じゃ話せない？」

少女はこくりと頷いた。

これは残念だった。

海中で聞いた彼女の声は、この世のどんな楽器よりも心地よかったのに。

「でも、練習したら話せるようになるかもね。声は出せる？」

「……あ」

人魚は驚いたように喉を押さえた。

自分で試したことがなかったようだ。

「あんまり、海から出たことがない？」

「……うん」

「歌は？ 人魚の言葉なら、陸でも話せるんじゃないかな」

人魚はちよつと息を吸い、歌いだした。

ちゃんと声は出ているが、人間には出せない声だ。

喉の構造が違うのかもしれない。

ローレンスは歌を聞いているうちに、眠たくなってきた。

しまった、人魚の声には、催眠作用があつたんだっけ……。

ローレンスは必死に眠気と戦ったが、そのうち、意識が途切れた。

「おい、起きろ」

その言葉とともに、体が抱き起こされた。

目をしばたかせると、レイモンドの顔が目の前にあった。

「レイモンド？」

「どこも怪我はないか？」

「うん。あれ、もう朝？」

ローレンスはレイモンドの肩を借りて立ち上がった。

ローレンスは浜辺で眠っており、背中についた砂をアンナが払ってくれた。

「ごめんね、遅くなって」

「いや……それより、 ラッカー の人たちは？」

「もう帰ったよ。カルヴィン……あんたと戦ってたやつは、むこうの船長に怒られてたけどね。
熱くなりすぎだって」

「それなら、今度会ったときに、謝っておかないとね。
熱くなってたのはお互いさまなんだから」

「それにしても、運が良かったな。
このお嬢ちゃんが、お前を助けてくれたんだぜ」

レイモンドが親指で背後を指す。

つられて振り返ると、人魚の少女がいた。

だが、昨日とは違い、人間の足がある。

あれは夢だったのだろうか？

「声帯に問題があるようだな。
名前は言えるようだ。嬢ちゃん、もう一度、名前を覚えてくれねーか」

「せ、シリア」

「だ、そうだ。ありがとうな、お嬢ちゃん。さて、船に戻るか」

「みんな心配してるよ」

アンナの顔をみると、目の下につつすらとくまができていた。

「ごめん」

「こういつ時はありがとう、でいいのよ。心配してくれてありがとう
うって」

「うん。ありがとう。セシリアも、助けてくれてありがとう」

ローレンスは感謝の気持ちをこめて、セシリアの頬をなでた。

すると、その腕にセシリアが抱きついてきた。

「え？」

がんとして放そうとしない。

その様子を見て、レイモンドが大笑いをした。

「罪な男だな、ローレンス。ただ倒れていただけで、女を惚れさせ
ちまうなんざ」

「そ、そという訳じゃ……」

ローレンスは戸惑って、セシリアを見た。

そこには、切実になにかを訴える目があった。

助けを求めている目だ。

「ぼくと一緒に来る？」

思わずそう言うと、セシリアは必死に頷いた。

「でも、君の正体を隠しておくことはできないよ。
少なくとも、船長たちには話しておかないと」

セシリアはびくりと肩をゆらしたが、ゆっくりと尋ねた。

「悪い人……じゃない？」

それは、人によって意見が異なるだろう。

略奪行為については、ローレンスは一切口出ししないことにしているが、「良い人」の行動ではない。

しかし、ローレンスはファム・ファータル号の乗組員たちが悪人のようには思えなかった。

「悪い人なんかじゃないよ。それに、もし君が危なくなったら、ぼくが責任を取る」

セシリアはほっと息をついた。

「おい、どうしたんだ？」

レイモンドがローレンスの肩に手を置いた。

「船に乗りたいらしいんだ」

「うちは海賊船だぞ。それでもか？」

さすがのレイモンドも驚いて、少し困惑気味だった。

「それと……この子は、人魚なんだ」

レイモンドとアリエルは、怪訝そうにセシリアを見た。

二人とも、信じていないのだ。

「俺の目が間違っていないなら、人間の足が二本あるようだが」

セシリアはそれを聞くと、海に向かって歩き出した。

「おい、お嬢さん、そこは深いぞ——」

レイモンドが言い終わらないうちに、水しぶきとともにセシリアの姿が消えた。

「セシリア！」

足でもすべらせたのか？

ローレンスは慌てて駆け寄り、セシリアの脇に手を入れてひきあげた。

背後ではつと息を呑む音が聞こえた。

視線を下に向けると、昨日見たのと同じ、魚の尾があった。

「本当に人魚なんだ……」

アンナが目丸くしたまま、ぼうぜんとつぶやいた。

船に戻ったあと、ローレンスは服を着替えた。

このあと、遅めの朝食をとったら、セシリアと一緒に船長室に行くことになっている。

ローレンスはセシリアがベッドの端に座り、物珍しそうに部屋を見回しているのを横目で見ていた。

そうやって観察しているうちに、ローレンスは聞きたいことが山ほどあったのを思い出した。

ひとつは、初対面であるはずの彼女がバンダナの下の痣を知っていたこと、もうひとつは、ローレンスが水のなかで呼吸できたことだ。ローレンスの聞き間違いでなければ、「目は人間の目なのね」と言われたような気がするし、そちらのほうも聞いておきたい。

「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8944o/>

ローレンス・ランズマン ～人魚に捧げる航海日誌～

2011年10月7日03時46分発行